

研究課題	現代における家庭科裁縫用具の動向と児童生徒との適合性		
氏名	塚崎 舞	所属	総合教育科学系
		職名	講師
APRIN e-ラーニングプログラムの受講		<input checked="" type="checkbox"/> ←受講済の場合はチェックをすること	
<p><b>【研究成果の概要】</b>（文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度）</p> <p>本研究は、近年多様化が進む教材用裁縫用具、とりわけ縫い針および指ぬきの形態と使用実態に着目し、教育現場における手縫い指導の改善に資する基礎的知見を得ることを目的として実施した。現在、市販されている裁縫セットには、従来のJIS規格には見られない独自仕様の針が多く含まれており、また、児童生徒の手指巧緻性の個人差により、指導が難しいという課題が報告されている。手縫い針の適切な選択は指ぬきの着用を前提とし、手指の長さに依存することが明らかになっているが、現代の児童が使用する教材の実態については統計的調査が不足している。手縫いは生活に不可欠な基礎技術であり、教育課程における成功体験の積み重ねは苦手意識の軽減に寄与することから、現代の学習者に適した裁縫用具の検討が求められている。</p> <p>本研究ではまず、教材用裁縫セットとして販売されている12種類の製品を収集し、特に縫い針と指ぬきの仕様を比較・分類した。その結果、多くの針がJIS分類に該当せず、最も近いものは和針の「木綿針」であった。また、指ぬきはセル巻革タイプのみが確認され、そもそも同梱されていない製品も存在した。これらの結果から、現行の教材用裁縫用具は和裁用具を基盤として改良されている可能性が示唆された。</p> <p>次に、教員養成課程の学生を対象に、手指の長さとは手縫いに対する意識調査を実施した。手指の長さの測定には、正確に長さを計ることができるワークシートを作成した。当初は、指ぬきを着用した状態で、手指の長さに適した針と教材に含まれる長針を用いた縫い作業性の比較を計画していた。しかし、家庭科教員から「現場では指ぬきが十分に活用されていない」という指摘があり、まずは指ぬきの適合性や非使用時の作業性を把握することを優先した。宮崎大学の共同研究者および宮崎県の実習助手と協議し、使用する指ぬき、針、布の種類を学生の視点から精査した。</p> <p>縫い試験では、セル巻革タイプとリングタイプの指ぬきを用い、針は学生の手指長から「木綿針第9号」を基本とした。布については、教材用縫い練習布、晒、新モスリンの厚さ・糸密度・剛軟性を測定し比較した。その結果、一般的に使用される晒よりも、新モスリンの方が縫い試験に適していると評価された。</p> <p>また、学生によるなみ縫いの実施では、セル巻革タイプの指ぬきは「ずれやすい」「甲に当てにくい」などの理由で使いにくいとの意見が多かった。さらに、指ぬきをどの指のどの部位に装着するかを知らない学生が圧倒的に多く、指ぬき自体に抵抗を感じていたことも明らかとなった。しかし、和裁を基本としたなみ縫いの仕方や指ぬきの必要性を説明し、布から針を引き出す際の抵抗について経験がないか尋ねると、学生は納得した表情を示し、指ぬきについて教育の中でほとんど触れられてこなかった実態が確認された。一方で、指ぬきを使用することで針を押し出しやすいと気づく学生もおり、指ぬきへの抵抗感には個人差が見られた。縫い目の評価については、共同研究者より提供された専用アプリとスキャナーを用いた画像処理により、客観的な数値化を行う方針とした。</p> <p>今後の課題として、縫い作業性の個人差を踏まえた評価基準の確立が挙げられる。また、今回は大学生を対象とした予備的調査であったため、今後は小学生から高校生までの手指の長さ・太さの計測を行い、縫い試験の方法を確立した上で本調査を実施する予定である。これらの成果をもとに、現代の児童生徒に適した裁縫用具・教材の開発と提案につなげたい。</p>			
<p><b>【研究成果発表方法】</b></p> <p>日本家政学会第77回年次大会ポスター発表実施。 東京学芸大学論叢として執筆中、今年度投稿予定。</p>			

※発表論文名（口頭発表を含む）、氏名、学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入すること。

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。

なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。